

抗コリン作用という薬の働きがあります。コリンとはアセチルコリンという体内の神経伝達物質の一つで、交感神経や副交感神経などから放出され、さまざまな働きをします。副交感神経による作用には目のピント調節、唾液の分泌、気管支収縮、胃腸活動の活発化、膀胱収縮、発汗などがあります。

これらの作用を利用した薬として、抗コリン作用薬があります。気管支喘息やおなかの痛み止め、排尿障害の改善などに用いられますが、他の抗コリン作用が、副作用となって現れることがあります。

市販薬の中で抗コリン作用が副作用となる薬に抗ヒスタミン薬や鎮痙薬（腹痛や生理痛

ちよつと得する
クエリの知識
97

抗コリン 副作用に注意

などの薬)、一部の下痢止めがあります。抗ヒスタミン薬は風邪薬や、花粉症などのアレルギーに効く薬、酔い止めなどに含まれる成分です。

薬を継続して飲むことで便秘になってしまったり、発汗を抑える働きによって夏場には熱中症になったりすることも考えられます。

抗コリン作用による副作用に特に注意していただきたいのは高齢者の皆さんです。風邪薬を飲んだらおしっこが出なくなった、口が渴いて仕方がないなどの経験をされた方がい

らっしゃると思います。特に前立腺肥大などで排尿障害の薬を服用していると、これらの症状が強くなることがあるので、十分な注意が必要です。

アレルギーの薬は抗コリン作用が非常に少ない製品が市販されるようになってきています。できる限り安全に薬を使うため、ご高齢の方、持病があり治療を受けている方が薬を購入する時は、薬剤師に相談することをお勧めします。（竹下秀司・県病院薬剤師会理事）

<毎月第4火曜日に掲載>